

## 校内適応指導教室について

### 不登校児童・生徒の状況

- ・昨年度の2学期から年度末まで不登校状態が続いた。
- ・不登校の要因は、友達との関係が原因である。
- ・感覚過敏もある。
- ・今年度より、校内特別支援教室に継続して登校できている。

### 具体的な取組

#### 組織力の向上

年度当初に校内研究の講師として、校内サポートルームの指導員を招き、講演会を実施した。

校内全体で、校内サポートルームの在り方や、取組を共有することができ、実施初年度、円滑なスタートを切ることができた。

#### 実践の成果等についての普及・啓発

令和5年度、東大和市教育課題研究指定校として市内全小中学校に実践を報告した。

また、学校運営協議会で、年間を通して取組の進捗状況を紹介し、広く啓発を図ることができた。

#### 校内体制の強化

長期欠席児童だけでなく、登校しぶりや教室に居づらさを感じている児童等、不登校ぎみの児童も対象としており、しばらく利用することで、再び継続して所属学級を中心に過ごすことができた。

校内サポートルーム指導員、特別支援教育コーディネーター、SSW、SC、担任等、該当児童の情報を共有し、きめ細やかな指導・支援を行うことができた。

#### 個々の不登校生徒への支援

取り組む課題や、校内サポートルームでの過ごし方等、児童の実態に応じて決めている。

1人1台端末を活用したAI型学習教材やオンライン授業等も活用した。



### 成果

- ・二年間欠席していた児童が校内適応指導教室に体験登校できた。(学期に一度ずつ)
- ・昨年度100日以上欠席した児童2名が、校内サポートルームに継続して登校できた。(登校率78%)
- ・学級全体の長期欠席児童の出現率が校内サポートルームを設置していない他校と比較して圧倒的に低くなった。

### 課題

- ・個に応じた具体的な目標の設定について。
- ・校内サポートルーム対象児童が増えた際の対応方法について。

## 一人一人の困り感に対応できる空間の提供

## 不登校児童・生徒の状況

当該生徒は中学3年生。聴覚過敏の傾向があり、教室内の音に困り感を感じることが原因で不登校になった。3年になり卒業後の進路について考える中で、静かな環境で自分のペースで学べる支援室（校内別室）を知り登校が始まった。週1, 2日午前中に登校し、支援室の仲間や支援員との関わりを深めながら、学習以外にも対人スキルを学んでいる。

## 具体的な取組

## 1 支援室の入室条件は、『不登校であること、学校に通いたい、学びたいこと…』

欠席の多い生徒は、普通に登校できている仲間と会うのを避ける傾向が強いため、非常階段・非常口を利用した、他の生徒に会わない玄関・靴箱で登校しやすい環境をつくっている。



## 2 パーソナルスペースを確保

毎時間多くても、6人くらいの生徒が利用しています。室内はパーテーションやカーテンでパーソナルスペースを確保することもできる。

周囲（他人）の人の視線も気にならず学習に取り組める。



## 3 自分のペースで、自分が取組みたいことから…

支援室では、自分でやることを決めて取り組みます。問題集やAI型学習教材、1人1台端末を使ってオンラインで授業を受ける、読書をする等。

対人スキルを身につける為にカードゲームやパズルを支援員と一緒にすることもある。



AI型学習教材

## 4 来れば誰かと会えるところ

支援員、先生、以前支援室で一緒になったことがある人、友達…支援室は必ず誰かと会えるところであり、一緒に時間を過ごす中で自分を見つめるゆとりも出てくる。

同時に不登校が改善しても、やむなく一時避難場所として使うこともできる。

## 成果

## 不登校に係る指定項目の数値の減少及び解消の抜粋

・R4年度不登校生徒発生率	6.1%
・R5年度不登校生徒出現率	4.5%
・R4年度内外の相談・指導等がない生徒	46%
・R5年度内外の相談・指導等がない生徒	0%
・R5年度登校日数5日以内の生徒	1.3%

## 課題

- ・支援室の利用について、支援員と連絡、調整を行っている担当教員の負担が大きい。
- ・教員によって、支援室、支援員との関わりに温度差がある。